

研究発表

「晩唐の詩人・杜牧(803~852)の詩と人生」 23.6.25 (谷中：漢詩&詩吟研究会) 菅原英介
大先輩の赤羽さんが、「李白」を2回、また志甫さんが「杜甫」を準備しているので、日本人にも人気の高い“江南の春”や“山行”の作者、「杜牧」をとりあげました。

1. 唐王朝の時代(年表) 7世紀はじめ~10世紀初頭(初唐、盛唐、中唐、晩唐)

初唐(618~711 玄宗即位前年)、盛唐(712~765)、中唐(766~835 甘露の変)、晩唐(836~906)

- 618 隋滅ぶ。李淵(りえん、高祖~626) 唐おこす。(622 聖徳太子逝去)
626~49 太宗(李世民) 貞観の治 (630 最初の遣唐使、645 大化の改新)
649~84 高宗、655 昭儀武氏(則天皇后) 立つ、(663 白村江の戦、672 壬申の乱
初唐の四傑：王勃(647~675)、盧照隣(641~676)、駱賓王(?~684)、揚炯(?~705)
690~705 則天武后実権を握り国号を周とする。(694 藤原京に遷都、701 大宝律令
712~56 玄宗(李隆基) 開元の治 唐詩の全盛時代。(710 平城京に遷都
孟浩然(689~740)、王之渙(695~?)、王維(701~761)、王昌齡(?~755?)、
李白(701~762)、杜甫(712~770)、高適(?~765)、岑参(715~770)、
744 李白、杜甫と親交を結ぶ。745 玄宗、楊太眞を貴妃とす。
(752 東大寺大仏開眼供養、754 鑑真和上日本に渡る。(参議篁 802~852
755~63 安祿山、史思明の乱、770 阿倍仲麻呂(698~770)、唐にて没す。
780 両税法を実施(戸税と地稅)(794 平安京に遷都、804 空海入唐→806 帰朝
孟郊(754~814)、韓愈(768~824)、柳宗元(773~819)、顔眞卿(709~785)、
830~844 党錮の獄(牛僧孺、李宗閔・李徳佑の争い)(866 応天門の変
劉禹錫(772~842)、白居易(772~846)、杜牧(803~852)、李商隱(812~858)、
859~73 農民暴動の頻発、875~84 黄巢の乱 (894 遣唐使を廃止・菅原道眞
907 朱全忠、哀帝を廢して皇帝を称し、唐滅ぶ (道眞 845~903、905 古今和歌集

2. 晩唐の時代(唐詩の夕映え) 9世紀半ば~10世紀初頭

晩唐の政治は、腐敗した暗黒時代であった。長安の春を謳歌した世は夢と去って、社会の風潮は衰退に向かっていった。地方には軍閥が割拠して、「地として藩(藩鎮=軍閥)あらざるはなく、藩として叛かざるは無し」という状況であった。民衆には深刻な禍をもたらした。国境には、ウイグル、チベット、南詔などの異民族の侵入がくり返されていた。その一方、宦官が皇帝の側近として、近衛兵の武力を握り、強力な政治的発言権を持ち、皇帝はすでに宦官の手中で弄ばれる傀儡に墮落していた。文宗の大和9年(835)の甘露の変は唐代史の中でも有数の大事件であった。それと同時に官僚集団の派閥闘争も激化し始めていた。それは牛僧孺(ぎゅうそうじゅ)と李徳裕(りとくゆう)の二人を各々の首領とする二派の争いであった。歴史上、「牛李の党争」(808~849年)と呼んでいる。牛派の人物は、多くは科挙出身の官僚で、李派の官僚は、門閥貴族出身者が多い。さらに「両税法」(戸税と地稅)が実施されて以来、晩唐になると人民が朝廷に納める税金は三倍に増え、その他の雑多な税金や徭役は数えられないほどであった。このように支配層と人々との矛盾、そして

支配層内部の対立が日ごとに深くなり、最後に黄巢(こうそう)が指導した農民の反乱(874年～885年)が勃発したのである。農民蜂起の失敗のあと、地主階級が武装して強大な力を持つようになったが、唐王朝は衰退して、もはや收拾することが出来なかった。やがて、軍閥が割拠する、四分五裂の五代十国の時代へと転じていった。

黄巢の農民蜂起の前夜に、杜牧や李商隠のような文学的才能を備えた詩人が出た。彼等の詩篇にも、時を憂い、乱を嘆き、国家の前途への憂慮が表現された。だが彼らは前向きによくしていこうという気概に欠けており、多くは、この危機的的局面に対して嘆き悲しみ、果ては退廢的になるばかりであった。詩の風格における晩唐詩人の表現は、多くは技巧に走り過ぎており、氣迫が足りない。これは李商隠の詩に見える「夕陽、限りなく好し、只だこれ、黄昏に近し」(楽遊原に登る)にほかならない。(詹鏗せんえい・天津社会科学院 唐詩入門)

漢詩といえば「唐詩選」いうくらいわが国では昔から親しまれてきた。本場の中国よりも読まれているという。ところが「唐詩選」には、白居易や杜牧といった有名な詩人の詩が一首も入っていない。編者とされる明の李攀竜(りはんりょう、1514～1570)は、中唐、晩唐時代の詩には冷淡で、もっぱら盛唐に片寄った選び方をした。もっとも多いのは、杜甫の51、ついで李白の33、王維31、岑参28と盛唐の時代の詩人が肩を並べている。

一方、唐詩選より約350年前、南宋の周弼(しゅうひつ)によって編纂された「三体詩」には、杜甫、李白の詩は一首も入っていない。中唐、晩唐の詩人の作品に多くさいている。「三体詩」の三体とは、七言絶句、七言律詩、五言律詩の3つの詩型をいう。

3. 杜牧の人生(とぼく、803年(貞元19年) - 852年(大中6年))
杜牧は、晩唐期の詩人。京兆府万年県(現・西安市)の人。字(あざな)は牧之。号は樊川(はいせん、地名)。襄陽の杜氏に属する杜甫と、京兆の杜氏に属する杜牧は、呉の討伐に貢献した西晋の名将で、「春秋経伝集解」の名著を持つ、文武両道の人、杜預(とよ、とよ～222～284、「破竹の勢い」の故事で有名)を共通の遠祖とする。若年の頃は美貌の風流才子として浮名を流したが性格は剛直で、『孫子』の研究者としても知られている。祖父に中唐の歴史家・杜佑(735～812年、3代の皇帝の宰相をつとめた大政治家。その編集した「通典」はすぐれた法制経済史として今日でも尊重されている。白樂天が杜佑が70歳過ぎても引退しないのを暗に批判した詩「不致仕」がある。このため杜牧は白樂天をいつまでも恨んでいたと伝えられる。杜佑は78才で致仕。)

を持ち、従兄・杜悰は皇帝陛下の娘(憲宗の長女・岐陽公主)を嫁にもらうほどの上流家庭の出身。詩人の杜荀鶴(～904年没)は庶子(末子)と言われる。杜牧は、杜佑の3男、杜従郁の次男として京兆府に生まれた。幼少期の10年間は、宰相を祖父に持つ輝かしい家の貴公子として過ごした。10歳の時この祖父が退官・病死し、それからほどなく生来病弱な父が没すると、杜牧一家の生活はたちまち困窮して住まいは借財のために人手に渡

杜舎人(晩笑堂画伝)



り、八年間に十回も転居したという。こうした貧困の中にあっても杜牧は敬愛する祖父の影響を受けて学問に励み、政治と社会、特に国の興亡を左右する兵事に深い関心をよせ衰退する唐朝の再興に尽したいと強く願うようになった。秦の急速な滅亡を借りて、游興にふける十七歳の敬宗を風刺した「阿房宮の賦」は、唐朝の前途を憂える青年杜牧（23、24歳ころ）の真情があふれ出た傑作であった。

828年、26歳で進士（高級官僚への登竜門の資格試験）に及第。同年上級試験の賢良方正科を合格。門下省の弘文館校書郎（図書館の職）を授けられて任官。10月、江西観察使の沈伝師の幕下に招かれ、洪州（江西省南昌）に赴く。沈伝師は、祖父杜佑に引き立てられた沈既済の子という縁もあり、杜牧の役人生活は順調なスタートを切った。833年、31歳の時に揚州の淮南節度使・牛僧孺の幕下に入り、書記を勤めた。後年、彼自身が“揚州の夢”と言って懐かしむ、風流三昧の日々がここにはじまった。当時の揚州は中国随一の華やかな都市。酒はうまいし、女性はきれいで、景色も美しい。杜牧はこの都会の魅力を満喫した。「唐才子伝」によると

牧、容姿美(うるわ)しく、歌舞を好み、風情頗る張り、自らとどむる能わず。時に、淮南(揚州)は繁盛を称詩し、京華に減せず、かつ名姫の絶色なるもの多し。牧、恣に心賞す。

揚州在任の3年間、毎晩妓楼に通い、風流の限りを尽くしたと言われる。

835年春、監察御史(官民の不法を取り締まる役)となり、「贈別」「遣懷」の詩を作り長安に赴任。都の政界にたちこめる不穏な空気感じとり、7月病気を理由に監察御史・東都分司となり洛陽に移る。宦官によって高官が殺害された“甘露の変”が起こったのは、直後の11月のことであった。

名門の子弟であり、才能を自負していて、内乱の相次ぎ、崩壊の近づいていた唐王朝の再建に心をくざいたが、はかばかしく出世はできなかつた。その後(35~40歳の頃にかけて、弟の杜顥とぎが眼病になりそして失明)は、一族を養うため(眼病によって視力を失った弟と子持ちの未亡人となった妹を養うため)、名門出身でありながら中央での出世を取らず地方長官(地方官のほうが収入がよかった)を志望し、黄州・池州・睦州・湖州の刺史(今でいう県知事)を歴任。852年に中央に戻り、中書舎人(天子の詔勅を起草する職)となる。

江南の風景を絵画のように表現した「江南春」、揚州での、風流才子としての姿を描いた「遣懷」、反実仮想的と言われる詩風をよく反映し、「捲土重来」の語の元ともなった「題烏江亭」がよく知られている。賦では「阿房宮賦」が有名。

杜牧は、亡くなる1年前(851年、49歳)に、甥の斐延翰(はいえんかん)に「樊川集」(杜牧の詩文集)の編纂を依頼する。樊川は長安の南郊外を流れる川の名前で、そこに杜牧の別

荘があった。斐延翰は、杜牧の姉が嫁いだ斐儔(はいちゅう)の子で、杜牧の死後ほどなく生前の委嘱に従って「樊川集」20巻(前の4巻が詩、賦を含む、後の16巻は文)を編纂し855年ごろ、後序を書き終えて完成させた。これが今日伝存する杜牧集の祖本となる。

杜牧の官僚人生

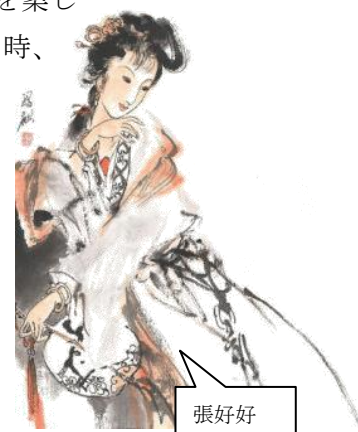
828年・26歳	3月～10月	長安にて、弘文館校書郎
26歳～28歳		洪州(江西省)にて、沈伝師の幕下
830年・28歳～31歳		宣州(安徽省)にて、沈伝師の幕下(832弟杜顥、進士に及第)
833年・31歳～33歳		揚州(江蘇省)にて、牛僧孺の幕下(834弟杜顥、李徳裕の幕下に)
835年・33歳		長安にて、監察御史。33歳～35歳
837年・35歳～37歳		洛陽にて、監察御史東都分司
839年・37歳～40歳		宣州にて、崔郾の幕下、団練判官(837冬弟杜顥、眼病悪化して失明)
842年・40歳～42歳		長安にて、左補闕・史館修撰
844年・42歳～44歳		黄州(湖北省)にて、黄州刺史
846年・44歳～46歳		池州(安徽省)にて、池州刺史
848年・46歳～48歳		睦州(浙江省)にて、睦州刺史
850年・48歳～49歳		長安にて、司勳員外郎・史館修撰
851年・49歳～50歳		湖州(浙江省)にて、湖州刺史(851二月弟杜顥、没する、45歳)
852年・50歳		長安にて、考功郎中・知制誥(851樊川の祖父杜佑の別荘を改修)
		中書舎人に昇進、年末に没す(852自ら墓誌銘を作る、詩文を整理し多くを焼却す)

杜牧のエピソード1：杜牧が揚州大都督の牛僧孺(779-847)の幕下に入り書記として官吏生活を送ったのは太和7年(833)。31歳の時から数年間であったが名門の出でもある好青年杜牧はこの遊樂の江都で風流のかぎりをつくした。杜牧の身を案じた牛僧孺が部下に命じて、密かに護衛させた。数年後、杜牧が中央にもどる時、牛僧孺が部下に“あれを持って参れ”と命じた。“自分でそれを開けてごらんなさい”。杜牧は文函を開けた。そこには報告書の束が収められていた。士卒の市内巡察の報告であった。

- ・杜書記は張家から江都楼、彩虹閣を回り、再び張家へ。帰宅。恙無し。
- ・杜書記は張家から流波館へ。宴会。遊侠の徒、宴席に闖入する者あり。取り押さえる。張家に戻り、帰宅。恙無し。
- ・杜書記は張家へ。九峰園。天瑞館。また張家。路地に入り二刻を経過して春屏原に出る。家まで同道。

杜牧は毎晩、妓楼のハシゴをしていた。先ず張好好(蘇州出身。彼女は揚州でも屈指の名妓として知られていた。)の処に行き、それから妓楼を回る。最後にまた張好好の処に戻り、泊まったり、家に帰ったりした。唐の揚州城は、隋の煬帝が造営した江都で、迷楼と呼ばれる豪壯な建造物が立ち並んでいた。

杜牧は読んでいるうちに赤面慚愧に堪えない。牛僧孺は続けて言う。“全部読んでも仕方



がない。大抵同じような報告だ。士卒の長に数えて貰ったら千枚を超える。”“毎晩、30人前後の部下が、私服であなたをそれとなく警護していた。”“あなたは千歳希有の才能の持ち主だから、国家の為に、そなたに万一のことがあってはならない。”

杜牧は言葉も無かった。(出典)『揚州夢記』唐の干業。

監察御史東都分司として洛陽に赴任した時、思いがけなく古なじみの妓女、張好好と再会した。杜牧33歳、好好は19歳になっていた。杜牧は、「張好好詩」という長編の詩を作って苦しい胸の内を吐露している。

エピソード2：『唐才子伝』『新唐書』に「弟・顛ぎの病を以て官を棄つ」とある。

杜牧は弟を揚州禪智寺で療養させた。ある年、見舞ったついでに友人を尋ねた。その時、彼は長年求めていた絶世の美女にめぐりあった。年を聞くと十余歳と言う。(“この少女が成長すれば、まさに天下一の美女だ”)杜牧は少女の母にかけあった。結納の金を渡し“10年経てば私は湖州刺史としてここへ赴任して来る。それまで待っていて下さい。10年です。”と言った。“でも、10年をすぎたなら。”と少女の母親は心配だった。二十をすぎると、婚期を逸したと言う時代であった。“10年すぎれば、仕方がない。きっと10年以内に戻って来ます。”杜牧は約束した。

杜牧は失明した弟一家を引き受けたので、地方長官(今でいう知事の職)を勤めなければ生活費が捻出できない。中央諸官を歴任すれば出世の近道だったが、杜牧自身は昇進のことは考えないことにした。弟一家を引き連れて、杜牧の地方官勤務が始った。湖州刺史就任が実現したのは、大中4年(850)、彼が四十八歳の時である。あの絶世の美少女を発見したときからすでに14年たっていた。喜び勇んで湖州に来たが…。

“10年のお約束でございました。もう一年待って、11年目に結婚いたしました。娘を是非にと熱心に望んでおられた人がいましたので。三年前のことです。それから、一年に一人ずつ子を生んで、いま三児の母となっています。”少女の母は弁明した。美少女はすでに人妻になっていた。“そうか。幸せだというから、めでたいことだ。残念ではあるが、目出度くもある。”杜牧はこみあげてくるため息だけでなく、涙まで出てきそうになった。

“一首できた。筆と紙を戴きたい。” 「嘆花」(花を嘆く)

自恨尋芳到已遲。	自から恨む、芳を尋ね、到ること已に遅きを
往年曾見未開時。	往年、曾って見る。未だ開かざるの時
如今風擺花狼藉。	如今、風擺いて、花狼藉
緑葉成陰子滿枝。	緑葉、陰を成して、子は枝に満つ

4. 杜牧(とぼく)(803~852)の詩

晩唐の時代を代表する詩人として、杜牧(803~852)、李商隱(812~858)、温庭筠(812~?)があげられる。なかでも杜牧の詩は、当時有名で、李商隱(りしょういん、「楽遊原」「夜雨寄北」など)と共に「晩唐の李杜、小李杜」とよばれ、李白・杜甫の「李杜」と区別された。杜牧は、李商隱、温庭筠、許渾、韋莊らが輩出した晩唐の詩壇にあって、ひとときわ清新、俊爽な詩風をもち、格調高き古典詩人であ



った。杜牧はまた古文も得意であった。清の洪亮吉は、こう評した。「有唐一代、詩文を兼ねてすぐれし者は、韓・柳・小杜の三家のみと」。杜牧は、杜甫の詩と韓愈の文章を特に好み、「韓杜の集を読む」の中でこう述べている。

“杜詩韓集、愁い来りて読めば、麻姑を雇いて痒き処を搔くに似たり”と。

「樊川はんせん詩集」に杜牧の詩、約600首が収められている。樊川（はんせん）は、杜牧の号である。その詩には国政の紊乱を憂えたものや、歴史を詠じたものが多く、高い識見と理想をうたいあげている。また、絶句を作らせたなら晩唐の詩人の中で随一といわれ「山行」や「江南の春」に見られるように、ことばが美しく格調高く、日本にもファンが多い。

安史の乱が発生した後の、社会の憂愁を反映する杜甫の詩に対して、杜牧の詩は内憂外患の続く混迷の世を生きた失意の悲哀、いわゆる「惆悵ちゅうちょう＝恨み悲しむ様子」の詩情を基調とし、それが悲哀に満ちた人生の諸相を映し出して深い感動をよんでいる。

晩唐の繊細な技巧的風潮を排し、平明で豪放な詩を作った。風流詩と詠史、時事諷詠を得意とし、艶麗と剛健の両面を持つ。特に懐旧の情をもった絶句に名作が多く、七言絶句に優れた作品が多い。杜甫の「老杜」に対し「小杜（わかき杜）」と呼ばれ、老杜・小杜の称は、二人が共に中国の古典詩の伝統を継承・発展させた、経国済民の責務を自覚する士大夫（知識人）らしい正統派の詩人であったことによる。

杜牧は宰相杜佑（とゆう）の孫で、若いころは、国を治め世を救う才を自負していた。「河湟」「早雁」などの詩では、その憂国憂民の思想や感情を表現した。

しかし、杜牧は、苦悩の思いを晴らす道がなかったため、私生活ではやや退廃的になり「十年一覚、揚州の夢、あまし得たり青楼薄幸の名」（懐を遣る）と歌っているのは、彼の放蕩生活の自画像にほかならない。杜牧は元来、七律と長編五古を得意としたが、詩の芸術的側面からいえば、完成度が高いのは主に七言絶句である。彼は、短く小さな篇幅を利用するのに巧みで、非常に練られた詩語を用いて、鮮やかな画面をくつきりと描き出し、しかも、婉曲で含意に富む中に、無限の感慨をこめたのである。彼は七言絶句のような小詩を用いて、最も大きな対象を捉え、詠史、感慨、抒情、叙景のいずれにも秀でた。

例えば、「華清宮を過ぐ」三首の第一首は次のようである。

「華清宮を過ぐ」三首の第一首

長安回望繡成堆、 長安 回望すれば、繡 堆を成す
山頂千門次第開、 山頂 千門 次第に開く
一騎紅塵妃子笑、 一騎 紅塵 妃子笑う
無人知是荔枝来、 人の是れ、荔枝の来るを知る無し

杜牧が華清宮を通ろうとして、振り返れば長安城中の景色が錦を織りなしたように美しい。前を見れば、驪山の頂上の幾万幾千もの宮門が続々と連なっている。そこで詩人は、「一騎紅塵」を用い



て次のことを暗に示す。天宝年間、四川から長安に新鮮な荔枝（れいし）を献上するために、馱馬が夜を日に継いでひた走る、砂埃を舞い上げ、どれだけの穀物を踏みつけ、どれだけの人馬を犠牲にしたかわからないほど。そうして荔枝を、色、香り、味を変えないで長安に届けても、楊貴妃の笑みを勝ち得たにすぎなかった。この含意を富む技法には、痛烈な風刺が込められている。

また、「赤壁」の詩では。

「赤壁」：843年、41歳の作

折戟沈沙鐵未銷、 折戟 沙に沈んで鉄未だ銷せず
自將磨洗認前朝、 自ら磨洗をもって 前朝を認む
東風不與周郎便、 東風 周郎のために 便ならずんば
銅雀春深鎖二喬、 銅雀 春深うして 二喬を鎖（とぎ）さん

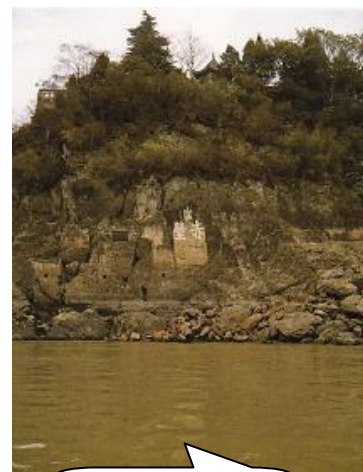
この詩の後の二句は、彼の史論である。彼は曹操と同じく「孫子兵法」に注を付しており、曹操を兵法に巧みだと評価していた。赤壁の戦いは周瑜が曹操を破ったが、もしもあの時、東風という都合のいい条件がなかったのなら「二喬」は銅雀台の虜になってしまっていただろう。この見方は、杜牧は、勝敗は英雄か否かを決めないことを示している。

詠懐の詩は、例えば次の「秦淮に泊す」などである。

「泊秦淮」<関吟A36>

煙籠寒水月籠沙、 煙は寒水を籠め、月は沙を籠む
夜泊秦淮近酒家、 夜、秦淮に泊して、酒家に近し
商女不知亡国恨、 商女は知らず、亡国の恨み
隔江猶唱後庭花、 江を隔てて、猶お唱う後庭花

杜牧が夜、秦淮河のほとりで泊まると、あたりにはそこはかたない寂しさが広がっている。彼は二つの「籠」の字を用いて、月光に浮かび上がる秦淮河とそのほとりの砂州に、霞がたちこめている様を描くが、それは彼の心の中の失意を象徴している。杜牧は料亭と向かいあった、人気のないところを選んで停泊した。だが、料亭に近いので、江を隔てて歌妓の歌声が聞こえてくる。それは、陳の後主がその昔作った、舞曲の「玉樹後庭花」であった。陳の後主は、酒色にふけり、政を顧みず、国を滅ぼすにいたった。同様に、現在（晩唐）、国の勢いが日々衰えている状況なのに、高官や貴族は、酒樓で亡国の音楽を楽しんでいる。国を思う忠誠心などは些かも無いのだ！だが、杜牧は直接彼らを責めるのではなく、「商女不知亡国恨、隔江猶唱後庭花」と妓女を責めている。その実、秦淮河の歌妓が何を歌うかは、すべて顧客たちの指定であり、彼女たちが自分で決められるわけがないのだ。唐王朝の破局への予感に胸を痛めていた杜牧の耳には「後庭花」の不吉なメロディーがたしかに聞こえていたのである。



赤壁（湖北省・蒲圻）



秦淮河の酒家（江蘇省・南京）

杜牧の抒情叙景詩も人口に膾炙しており、例えば次の「山行」がその一つである。

「山行」<関吟A 1 6>～超俗世界への誘い

遠上寒山石徑斜、 遠く寒山にのぼれば 石徑斜めなり
白雲生處有人家、 白雲 生ずるところ 人家あり
停車坐愛楓林晚、 車を停めて坐るに愛す 楓林の晩れ
霜葉紅於二月花、 霜葉は二月の花よりも紅なり



山の紅葉の風景

秋の日の夕暮れ、人気のない山の奥深く、曲がった道が彼方までのびている。竹のまがきのあるかやぶきの家が、「白雲生處」に、現れたり隠れたりして見える。詩人は、この楓の林の夕暮れの風景にひかれたので、わざわざ車を止めて降りてきた。見れば、この楓林の紅葉は、春の花よりももっと、もっと鮮やかだ！と歌いあげる。

(結句を見て当時の人々はびっくりしたのではないか。霜に打たれた秋のもみじ赤さと、春爛漫桃の花とを対比させ、しかもさびた秋の世界のほうが赤いと言っているのだから。まったく対極のシーズンにおける対極の赤さを比較するという普通なら人の気づかない「意外性」を詠っている。石川忠久・朗読で味わう漢詩、青春出版社)

以上の例から杜牧は、晩唐詩のあでやかで技巧的な風潮の中で、やはり明るく爽やかな、独自の詩風を保持しえたことがわかる。(詹鏗せんえい・天津社会科学院 唐詩入門)

杜牧より10歳ほど年下の李商隱は、849年「杜司勳(司勳員外郎に在任中の杜牧)」という詩を作って、杜牧に対して深い敬愛を込めながら歌った。

刻意傷春復傷別 ころろを刻みて春を傷み、復た別れを傷む
人間惟有杜司勳 人間、惟だ杜司勳あるのみ

骨身を削る思いで行く春(青春)を、そして離別の悲哀を、ころろをこめて痛切に詠いあげた詩人は、人の世では、ただ杜牧どの、あなたただ、と。

杜牧の詩が長く愛唱される要因の1つは、清新・俊爽・流麗な風格の中に、時間の推移とともに移ろいゆく人生の悲しみと響きあう、惆悵たる孤高の詩心が、濃やかに漂い流れるためであろう。そうした杜牧の詩心の本質とその輝きを、最も早く見定めた言葉として、李商隱の詩句は、これからも長く記憶されるに違いない。(植木久行、岩波文庫・杜牧詩選)

石川忠久氏の杜牧の詩の評論。①良い家柄、②あふれる才能、③豪気な青春、④挫折、杜牧の詩は、この4つを綯い交ぜにしてできたものである。どの一つが欠けても杜牧の詩にならない。典型的な詩は、「題禪院」「山行」である。(杜牧100選、NHKライブラリー、石川忠久)

杜牧の詩風については、自身が「某苦心為詩 本求高絶 不務奇麗 不涉習俗 不今不古處於中間」(某苦心して詩を作る。本、高絶を求めて奇麗を務めず、習俗に涉らず、今ならず、古ならず、中間に拠る)(卷十六献詩啓)と語る。自作の詩を謙遜気味に述べているが、洗練されたセンスの良さが自然ににじみ出ている。このような味わいは、一代で獲得できるものではない。数代にわたる上品で知的な家庭環境に恵まれて現れる才能であろう。(杜牧100選、石川忠久氏)

4. その他の杜牧の詩

杜牧の詩は、関吟には、7首。「江南春望」(A1)、「漢江」(A2)、「山行」(A16)、「秋夕」(A25)、「泊秦淮」(A36)、「清明」(A38)、「題宣州開元寺水閣」(B29)

(1)江南春望（杜牧）〈関吟A1〉～江南の春景色 作年代不明

千里鶯啼緑映紅	千里鶯啼いて緑、紅に映ず
水村山郭酒旗風	水村山郭酒旗の風
南朝四百八十寺	南朝四百八十寺（注・関吟は、はちじゅうじ）
多少楼台煙雨中	多少の楼台煙雨の中



鶯は啼き緑の木々に花の紅が美しい水辺や山の麓には居酒屋の旗が翻っている。南朝以来の四百八十もの寺々があり、その楼台が春雨の中にかすんで見える

*江南・長江下流地方の美しい春景色を歌った詩。江南地方は緑ゆたかな水郷で、乾燥した北方から旅した作者には目のさめるような風景であった「江南の春」は杜牧の詩の中でももっとも人口に膾炙した七絶の秀作で、わが国でも詩吟で詠われている。「山郭」とは山あいの村や町で、周囲が土壁で囲まれている。「酒旗」は酒屋が目印に立てた細長い青い布の旗で、当時の江南の風物であった。南朝とは、5、6世紀に建康（現在の南京）に都をおいた宋、齊、梁、陳の4王朝（呉、東晋を加えて六朝ともいう）で仏教が栄え寺院が多かった。前の対句は晴れた日の田園風景を、あとの対句は春雨けぶる古都の情景を描いて一対の屏風絵のような趣がある。

「江南」について当時の人々が描くイメージは、明るい南の農村風景と、唐の前の時代である六朝の350年間に貴族文化、仏教文化が栄えた古都金陵（南京）のたたずまいの二つ。前半と後半とで江南の春景色を総合して見事に詠いあげている。

「ハゼ釣るや水村山郭酒旗の風」と江戸中期の俳人で蕉門の十哲のひとり、服部嵐雪が詠んだこの句は、本歌取り俳句の見本となった。はぜ釣りは本来秋の季語だが、江戸っ子嵐雪が隅田川のほとりで釣っている図はさまになっている。

(2)漢江（杜牧）〈関吟A2〉：839年、37歳の作

溶溶漾漾白鷗飛	溶溶、漾漾として、白鷗飛ぶ
緑浄春深好染衣	緑浄（きよ）く春深くして、衣を染むるに好し
南去北来人自老	南去、北来、人自ずから老ゆ
夕陽長送釣船帰	夕陽、長く送る、釣船の帰るを

水ゆたかにゆらめき流れる川面のうえを、真っ白なカモメが飛んでいく。あおい水は清らかに澄み、春の季節も深まって、まるで衣服も染まってしまうようだ。ああ、南へ北へと行き来する旅のなかで、人はいつしか老いていく。紅い夕陽の光だけは、長くどこまでも、家路につく釣り船を優しく照らし続けている。



*白鷗は天空を飛び、波間に漂う白いカモメ。海鷗、江鷗（淡水の水鳥）を総称する。詩中

では、「列子」黄帝篇に見える有名な寓話…海辺に住む男が、無心にカモメと遊んでいたときには、百羽以上も集まった。ところがある日、父親に言われて捕らえて帰ろうと思った時には、カモメは舞い降りて来なかった。…下心や邪心のない人だけが、親しみあえる水鳥として、隠者の友となるという。のどかに釣り船に身を託す釣り人、漁翁の姿は、古くから樵とともに、俗世間の名利をさけて自然の中でのびやかに暮らす理想的な生活者、すなわち隠者とみなされてきた。(白鷗は、李白の「江上吟」〈関吟C21〉にも出てくる)

(3)秋夕 (杜牧) <関吟A 2 5>~秋の夜「閨怨(けいえん)」の吟。男女の情愛を描く漢詩の題。

紅燭秋光冷書屏	紅燭の秋光、画屏に冷ややかなり
輕羅小扇撲流螢	輕羅の小扇、流螢をうつ
搖階夜色涼如水	搖階の夜色、涼、水のごとし
坐看牽牛織女星	坐ろに看る、牽牛織女の星

紅いともしびの放つ、わびしい秋の光が、美しい衝立をひんやり照らしている。もの思う宮女は、軽やかに薄絹の小さな団扇で、時おり迷いこむ螢をそつとうつ。宮殿をつつむ夜の光は、まるで流れる水のように冷たく澄みわたり、その宮女は、ただじっと牽牛、織女の二つの星を見つめている

*天子の寵愛を失った宮女の悲しみを歌っている。秋風の到来ともに棄てられる団扇に託して、寵愛の衰えを恐れた、前漢の班婕妤(はんしょうしよ、成帝の時の宮女)の歌、「怨歌行」を踏まえている。

(4)清明 (杜牧) <関吟A 3 8>

清明時節雨紛紛	清明の時節雨紛紛(ふんぷん)
路上行人欲断魂	路上の行人魂を断たんと欲す
借問酒家何処有	借問す酒家は何れの処にか有る
牧童遥指杏花村	牧童遥に指さす杏花の村

春真っ盛りの清明だというのに霧雨が降っている。雨は旅人である私の魂を滅入らせてしまう。すまないが酒屋は何処にあるかと問いかけると、牧童は遥か向こうの杏の花が咲いている村を指差した。

*この詩の見どころは結句の杏の花である。杏の花咲く村、それは世俗の世界と対局を成すもの。世俗の塵にまみれた心は、その世界(隠者の住むところ)に遊ぶことによって洗われる。「牧童」はその世界への仲立ちをなすものである。この詩は杜牧の詩集に載っていないことから杜牧の作ではないという説もある。杏花村は、山西省汾陽の東と、安徽省貴池の西とにあり、どちらも酒の産地として知られる。



杜牧「清明」詩意図(馮熾臨・画、漢詩への誘い)

(5)遣 懷 (杜牧) : 835年、33歳の作(揚州を去る時)

落魄江湖載酒行	江湖に落魄して酒を載せて行く
楚腰腸断掌中輕	楚腰纖細、掌中に輕し
十年一覺揚州夢	十年一覺(いっかく)揚州の夢
贏得青樓薄倖名	贏(あま)し得たり青樓薄倖の名



「遣懷」陳輝光・画(唐詩參百首)

江南で遊び暮らした頃、どこへ行くにも酒を載せて旅をし、昔の楚の国美女かくやとばかり、ほっそりとした美人と戯れた。しかし揚州の歓楽街での十年の夢が今覚めてみると、ただ歓楽街での浮気おとことという評判ばかり。

*楽しく、自由奔放に生きた青春時代への追憶と悔恨とが甘酸っぱくこみあげてくる。杜牧にとって江南での哀感は、よほど深かったものであろう。

(6)題烏江亭(杜牧) : 839年、37歳の作

勝敗兵家事不期 勝敗は兵家の事期せず
包羞忍恥は男児 羞を包み恥を忍ぶは是れ男児
江東子弟多才俊 江東の子弟才俊多し
卷土重来未可知 卷土重来(ちょうらい)未だ知る可ず

戦いの勝敗の行方は兵法家でも予測できない。恥をしのび周囲の冷たい視線に耐えてこそ誠の男。項羽の本拠地江東には優れた人材が多いと聞く。土ぼこりを巻き上げて反攻していたらその結果は異なったかもしれない

*霸王項羽の自刃の地、烏江を杜牧が、一千年後に訪れて作った。王安石が是に因んで詩「和題烏江亭」を作っている。



西楚霸王祠(安徽省・和县)

(7)「贈別」(杜牧)(別れに贈る)～こんなに愛が深いとは。835年、33歳の作

*杜牧が揚州で最も気に入っていた妓女と別れるに際して贈った詩である。

多情却似總無情 多情は却って似たりすべて無情なるに
唯覺樽前笑不成 唯覺ゆ樽を前に笑いの成らざるを
蠟燭有心還惜別 蠟燭心有りて還って別れを惜しむ
替人垂涙到天明 人に代わりて涙を垂れて天明に到る。

「贈別」は、風流才子杜牧が揚州を去るにあたって、一夜、愛人(妓楼の妓女)と別れを惜しんだ情緒纏綿たる相聞詩。多情は愛情が深いこと。無情のはその反対で、薄情。揚州は若いころこの地に勤務して游興にふけり、浮名を流した思い出の地である。

(8)「題宣州開元寺水閣」(杜牧) 838年、36歳の作 <関吟B29、律詩>

*「三体詩」にも再録されている有名な「懷古」の詩。特に5句目、6句目(頸聯)の「深秋簾幕千家雨、落日樓台一笛風」がすぐれたものとされる。一方は降りしきる雨の、一方は晴れた夕暮の景色を描いて、この寺の眺めを詠い、六朝への懷古の情をいざなう。「江南春」と同じ手法。

六朝文物草連空 六朝の文物、草、空に連なり
天澹雲閑今古同 天澹らかに雲閑かにして今古同じ
鳥去鳥來山色裏 鳥去り鳥来る、山色の裏
人歌人哭水聲中 人歌い人哭す、水聲の中
深秋簾幕千家雨 深秋簾幕、千家の雨
落日樓台一笛風 落日樓台、一笛の風
惆悵無因見范蠡 惆悵す、范蠡を見るに因無きを

参差煙樹五湖東 参差たる煙樹、五湖の東

六朝の華麗な文化が栄えたこの地も、今はただ雑草が天の果てまで延び広がるばかり。やすらかな空、のどかな雲の姿だけは、今も昔も変わらない。鳥たちは、昔からこの山の緑の中を、自由に往来して生を楽しみ、人々は溪流の水音の中で、喜びに歌い、悲しみに泣いて暮らしてきた。深まりゆく秋、簾をおろした無数の家々に降る冷たい雨。沈みゆく夕日の中、遠くの楼台から、笛のひとふしを伝える、微かな風。ああ、悲しいことに、おとこの理想を貫いた范蠡に会うすべは、もはやない。はるか東、五湖のほうを眺めやっても、もやにかすむ木々が、高く低く連なって視界をとぎすのだ。

*宣州は現在の安徽省宣州市。唐代、宣歙觀察使が置かれた江南の重鎮。城まちの東郊を宛溪と句溪が北流し、南朝・斉の謝朓、盛唐の李白が愛した、風光明媚の地として名高い。

(9) 酔後題禪院 (杜牧) : 851年、49歳の作 (最晩年の作、青春時代を懐古)

觥船一棹百分空 觥船一棹(こうせんいっとう)、百分空し

十載青春不負公 十載(じゅっさい)の青春公に不負(そむかず)

今日鬢糸禪榻畔 今日鬢糸、禪榻の畔(ほとり)

茶煙輕颺落花風 茶煙輕(かる)く颺(あが)る落花の風

大盃になみなみと注いでぐっとひと飲み、我が青春の十年は他人には負けないものだった。今は鬢に白いものが混じり禪寺の書院に座っている。寺でたてる茶の煙が落花の風に乘って流れている

*杜牧の極めつきの傑作。風流才子の中年の感傷はまことにほろにがい。この詩から「茶煙鬢糸」という言葉が生まれ、北宋の蘇東坡がしばしば詩に詠みこんでいる。蘇東坡も茶が好きであった。飲茶が一般に普及したのはちょうど杜牧の時代のころであった。

5. 余話1：杜牧の末子・杜旬鶴 「心頭を滅却すれば火もまた涼し」の語源。

杜旬鶴は他家で育てられたらしい。杜牧と父子の対面をしたという話は伝わっていない。彼も唐末に科挙に合格し出世した。詩は才気あふれるものだが、性格は傲慢だったので人に恨みを買ひ、殺されかけた事もあるという。「心頭を滅却すれば火もまた涼し」と言う句は、信長に焼き討ちにあった甲斐の国恵林寺の快川和尚がこの句を朗誦して悠然と死についたので、有名ある。これは杜旬鶴の「夏日題悟空上人院」(夏日悟空上人の院に題す)という詩の一節である。

三伏閉門披一衲 三伏 門を閉ざして 一衲を披(ひら)く

兼無松竹蔭房廊 兼ねて松竹の房廊を蔭らす無し

安禪不必須山水 安禪 必ずしも山水を須(もち)いず

滅却心頭火亦涼 心頭 滅却すれば 火も亦た涼し

余話2：日本人の好きな漢詩 第1位は？、杜牧の詩は？

石川忠久氏と万葉集研究で知られる国文学者、中西進氏の「漢詩歎談」(2004年初版、大修館書店)に「付録：日本人の好きな漢詩」と題して「漢詩国民投票」集計結果なるもの

が掲載されている。これは、大修館書店が発刊する雑誌「月刊しにか」(SINICA)誌上で2002年4～6月、読者を対象としてアンケート集計した結果のランキング(作品・詩人部門ともに一人最大3票まで)が出ている。総投票者数は363人。国民投票というのはいささか大袈裟(?)。とはいえ、漢詩好きの目の肥えた読者諸氏の結果であることは言うまでもない。(大修館書店発行:月刊しにか2002年10月号にも掲載されている)

第1位:杜甫の「春望」。(84票)(春望は、人によってはやや女々しいと感じるようで「唐詩選」にない)

芭蕉が「奥の細道」で、「国破れて山河あり、城春にして草木青みたり」と引用。芭蕉も引用したくらいだから江戸時代から「春望」は知識人の間では流布していたのであろう。

第2位:杜牧の「江南の春」。(46票)第3位:王維の「元二の安西に使いするを送る」(40票)、第4位:孟浩然「春暁」、第5位:静夜思(李白)、鶴鶴楼に登る(王之涣)

第7位:早に白帝城を発す(李白)……第12位:杜牧・「山行」

詩人では、第1位:李白216票、第2位:杜甫185票、第3位:白居易、杜牧69票
第5位:王維64票 (*杜牧も、現代日本人に結構、人気がある。)

余話3:猿～“断腸”、杜牧の詩…NHKTV新漢詩紀行から(石川忠久氏)

中国と日本では、猿のイメージがずいぶんと違う。日本ではどちらかと言うと愛敬のある動物、あるいはサルカニ合戦のようにずる賢い動物として描かれている。しかし、中国では圧倒的に悲しい動物。それはその鳴き声からきている。その猿は実は今の我々が見るサル(モンキー)ではなくて、黒く毛むくじゃらな手足の長い“テナガザル”(Gibbon ギボン)のようなものらしい。そもそも猿の種類が違う。その鳴き声は、物悲しい鳴き声である。長江の上流の絶壁のところ、昼でも暗いようなところで、旅の途中で、その声を聞かされたんじゃあ、たまったもんじゃあない。そんなことからこの猿を詠う詩がたくさんできた。その1つに杜牧の詩がある。

猿(さる) 杜牧

月白煙青水暗流	月白く煙青くして水暗に流る	月が白く輝きもやが青くかすんで川はひそやかに流れる。群れから離れた猿は悲しげに秋空
孤猿銜恨叫中秋	孤猿恨をふくんで中秋に叫ぶ	に叫ぶ。猿の鳴き声をわずかに聞いただけで腸
三声欲断疑腸断	三声断んと欲して腸を断つかと疑う	は断ち切れんばかり。その悲しさで少年も白髪
饒是少年須白頭	饒は是少年も須べからく白頭なるべし	頭になってしまうにちがいない。

杜牧は、晩年は不遇であった。その不遇な人生を振り返りながら、このような猿の声に託して自分の悲しみを詠っている。

「断腸」の語源

世説新語(宋の劉義慶403～444の著)に出て来る。4世紀(東晋の時代)のころ、ある将軍が長江の上流を舟で遡っていった。遡るときは流れに逆らうので舟はゆっくり進んで行く。家来がふざけて岸辺で母ザルと子ザルが遊んでいた、その子ザルを捕ってしまう。すると母ザルが悲しんでどこまでも、どこまでも舟を追いかけて来る。最後にとうとうもんどりうって、舟に飛び込

んできて死んでしまう。そこで将軍が猿の腹を裂いてみると、ハラワタがずたずたになっていたという。これが“断腸”の起こりという。(どうやら作り話らしい)

でも大事なことは「猿」と「断腸」という言葉がむすびついているということ。ことほど左様に猿は中国文学では悲しい動物である。日本では愛敬物であるが、中国文学では悲しい動物として詠われている。このことは非常に大事なことである。(石川氏が)このあたりを旅行した時“サルはいますか?”と聞いてみた。土地の人はキョトンとしていた。“そんなもんはいませんよ。”毛が黒くて、手足が長いサル (Gibbon テナガザル) は、今は全くいない。今いるのは日本の猿と同じ (モンキー) サルがいる。どうやら手足の長い毛の黒いサルは、東南アジアのほうに行ってしまったようである。

参考：破竹の勢い (はちくのいきおい～猛烈な勢いのこと) : 出典：晋書 (杜預伝)

三国時代も蜀が滅び、魏が晋にとって代わられた後のこと。晋は呉を攻略するために大挙して南下した。翌年の2月には武昌を攻略し、その地で軍議を開いた。ある者が、“すでに春が近く、長江の水が増水するのは間もないことなので、この武昌の地に長く留まることは、困難でしょう。一度軍を引き、冬にまた寄せたほうが良いと思う。”という、鎮南将軍の杜預が、“今、わが軍は勢いに乗っている。例えば、竹を裂くときのような。二節、三節と裂いていけば、残りは自然に裂けていき、力を加える必要もないだろう。この機を逃すべきではない。”と言って進撃を唱えた。晋軍は、攻撃の態勢を整え、呉の都、建業を目指して殺到し、ついにこれを攻め落として呉は降伏した。

<参考文献>

1. 「唐詩入門」：詹鍇せんえい著・天津社会科学院、中国古典入門叢書 12 (1987. 6. 20 発行)、日中出版
2. 「唐詩の世界」：入谷仙介著、(1990. 10. 30 発行)、筑摩書房
3. 「漢詩に遊ぶ」：松下緑著、(2006. 7. 25 発行)、集英社文庫
4. 「朗読で味わう漢詩」：石川忠久著、(2003. 6. 15)、青春出版社
5. 「杜牧詩選」：松浦友久・植木久行著、(2004. 11. 16 発行)、岩波文庫
6. 「漢詩を詠む 杜牧 100 選・風流才子杜牧の詩と人生」石川忠久著、NHKライブラリ (2004. 10. 15)
7. 石川忠久・中西進の漢詩歓談 (2004. 9. 1) 大修館書店
8. ウキペディアなどインターネットから引用。
9. 新漢詩紀行 (NHK TV 2010 年放送・石川忠久監修)